

for the siliceous components of the diatom cell. *Nova Hedw. Beih.* 64: 513-533.
SIMONSEN, R. 1979. The diatom system: ideas

on phylogeny. *Bacillaria* 2: 9-71.

VAN HEURCK, H. 1882. *Synopsis des Diatomées de Belgique*. Atlas. Ducaju et Cie., Anvers.

横浜康継：筑波大学下田臨海実験センター Yasutsugu YOKOHAMA: Shimoda Marine Research Center, The University of Tsukuba

1933年に東京文理科大学附属臨海実験所として開設されて以来、戦後の学制改革に伴い、東京教育大学理学部附属臨海実験所と改称され、さらに東京教育大学の閉学と筑波大学の開学に伴って、1976年に筑波大学下田臨海実験センターと改称された。

伊豆半島の南端近くに位置する下田湾の一部をなす小さな入江である鍋田湾を前にした 18,200 m² の敷地に、延べ面積 1,185 m² の 3 階建ての第 1 研究棟、183 m² の平屋の実習棟、624 m² の 2 階建ての第 2 研究棟、91 m² の平屋の海洋観測棟、986 m² の一部 2 階、一部 3 階建ての宿泊棟などが建っている。

実習室は第 2 研究棟内にもあるので、30 名程度の実習を 2 つ同時に行なうこともできる。船舶は 18 t で定員 30 名の「つくば」、0.8 t で定員 5 名の「みさご」の他、船外機付ボート 1、和船 2 がある。実習用備品としては、双眼顕微鏡 (ニコン CL-1) および双眼実体顕微鏡 (オリンパス X-2) 各 40 台、光合成呼吸測定装置 (プロダクトメーター) 6 台、海藻標本乾燥器 (永田式) 3 台など、研究用備品としては、電子顕微鏡 (日立 HS-9)、分離用超遠心分離機 (日立 65 P) ブラウン管オシロスコープ (日本光電) 分光量子計 (QSM-2500)、生産酸素計 YSI、水中スターラー付溶存酸素計 YSI、ダブルビーム自記分光光度計 (島津 UV-200) などがある。

臨海実習は筑波大学の生物関係、地球科学関係だけ

でも 10 前後を数え、その他に東京学芸大学、東京都立大学、静岡大学、群馬大学、山梨大学、愛知教育大学、信州大学、秋田大学なども利用している。その他、研究者、大学院生、あるいは卒論生等による利用も多く、年間の延べ利用者数は 7 千人を超えている。

鍋田湾の両岸は共に磯で海藻の採集に適しているが、特に左岸の広い波食棚には多種多様な海藻がみられる。潮間帯には上部の方からマルバアマノリ、ヒトエグサハナフノリ、フクロフノリ、イワヒゲ、イシゲ、イロロ、マツノリ、イボツノマタ、イカノアシ、ウミトラノオ、ヒジキ、ネジモクなどが生え、タイドプール中には、オキツノリ、オゴノリ、ビリヒバ、ウスカワカニノテ、アミモヨウなどがみらする。漸深帯や下位のタイドプールには、カバノリ、ウミウチワ、マメダワラ、ヤツマタモク、アカモク、ノコギリモク、オオバモク、ホンダワラ、ハハキモク、イソモクなどが多く、また波のよく当る場所にはオオシコロ、暗い岩陰にはミドリゲなどが生えている。

下田へは東京から直通の特急で 2 時間 40 分、急行で 3 時間 10 分ほどで着き、関西方面からなら熱海で乗り換えると、それから 1 時間 30 分ほどで着く。終点の伊豆下田駅からはタクシーなら 5 分ほどでセンターへ着く。食事は日曜祭日は提供できないが、センター周辺には喫茶点やレストランが数軒あるため不自由はないであろう。また市街は徒歩で 10 分ほどの距離にある。

筑波大学の実習は春休みと夏休みに集中し、他大学の実習は 4 月中旬から 5 月にかけて多いが、実習中も団体でなければ利用可能である。利用申込は所定の用紙によって、〒305 茨城県新治郡桜村、筑波大学学務第 2 課管理係 (電話 0298-53-2206) または 〒415 静岡県下田市 5-10-1、筑波大学下田臨海実験センター (電話 05582-2-1317) へ。利用目的を充分達成するために、利用に先立って情報の必要な方は、藻類関係なら横浜まで連絡いただきたい。

(筑波大学下田臨海実験センター)

